

40 年余の研究生生活を振り返って

成瀬 敏郎

昨年の5月、新潟での仕事の帰路、短時間であったが、信州小諸に立ち寄ることができた。学生時代に読んだ島崎藤村の『千曲川のスケッチ』の舞台になった小諸付近の情景をこの目で確かめたかったからである。この本は、千曲川流域の四季の情景を緑、黄、赤、白など、さまざまな色彩を織り込みながら、たくましく生きていく小諸の人々の生き様をみごとに描きだしている。

新緑から深緑色に移り変わる5月の千曲川沿いにはまだ広い森が残り、その中を縫うように「しなの鉄道」が通っている。東に向かう列車の車窓から丸みを帯びた浅間山の頂が見えはじめ、終点の小諸に近くなったことが網棚から荷物を降ろす乗客の動きから知ることができた。

小諸駅で列車を降りると、初夏のまぶしい陽光を受けて深緑色の木々の茂みのところどころが黄金色に光っている。陽光を照り返す広葉樹のつややかで幅広い葉の黄金色が、まもなく夏を迎えようとする信州の季節の移ろいを物語る特有の色であることに気がついた。藤村は、小諸での単調な教員生活の中で、黄金色に照り映える木々の葉に初夏の到来を感じ取ったのであろう。色彩はフィールドを歩いてはじめて分かることである。

私がフィールドを歩くようになったのは学部2年生の時に地理学を専攻してからである。地理学を専攻したのは、文系と理系の間に位置する地理学に魅力を感じたのが主な理由である。

学部時代には横浜市立大学の先生方から地理学の基本を教えていただき、広島大学大学院では自然地理学の基本を教えていただいた。大学院時代の後半は大学紛争の中であって騒然としたキャンパスはとても勉強ができる環境ではなかったが、紛争の中で学んだことは、大学人とは世界に発信できるレベルの研究を進めるとともに教育に情熱を持たねばならないという基本的な事柄であった。

大学に勤務するようになってからはフィールドワークを中心とし、日本をはじめ世界各地の調査に関わることができた。広島大学では教務補佐員、助手として勤務させていただき、多くの図書に囲まれた環境の中で、勉強を続けることができた。職種柄、自分の研究に没頭することはできなかったが、優れた先生方の指導の下で20代から30代前半という研究の基礎を培うべき時期に勉学にいそしむことができる環境に恵まれたことは幸運であった。

1981年に兵庫教育大学に赴任することになった。すでに赴任されていた白井義彦先生と広島大学の石田寛先生の推挽によって兵庫の地で働くことができるようになったおかげで、それまで構想を練っていた風成塵研究を進めることができる環境が整った。

赴任後、すぐに風成塵の研究に着手し、日本各地を歩き回った。当時は日本列島に風成塵が堆積してできたレス（黄土）が分布するという考えは非常識であり、地球科学の諸成果にも抵触することが多かった。そのためにある先生の退官記念論文集の執筆陣から外されるなど、私の風成塵研究に対して多くの批判が寄せられたことが昨日のこのように思いだされる。

しかし、しだいに研究に対する理解が広まるとともに、研究に加わってくださる方が増え、風成塵の研究を定年まで継続できたのはありがたかった。とくに、岩手大学の故井上克弘先生、岡山理科大学の豊田 新先生、神戸大学の田中真吾先生、日文研の安田喜憲先生などをはじめとして、兵教大地理学教室の藤井宏先生、吉本剛典先生、南塾猛先生など、

じつに多くの先生方から温かいご支援を受けた。

近年は福井県立大学の北川靖夫先生をはじめ農芸化学分野の先生方と共同で、与那国島から北海道までの各地に分布する土壤に含まれる石英の酸素空孔量に着目した風成塵研究を進めることができた。その結果、日本列島の土壤が大陸起源の風成塵の影響を強く受けているとする私の考えを追認することができた。また同志社大学の松藤和人先生や林田明先生、京都フィッシュントラックの檀原 徹氏をはじめとする多くの方々とレスー古土壤層序に着目した東アジアの旧石器編年研究に携わることができた。いずれの仕事も、必ずしも先生方にはお役に立てなかったかもしれないが、自分なりに精一杯の努力をしたつもりである。

このように兵庫教育大学在任中は実に多くの方々との共同研究や研究費のご支援をいただき、さらに大学院と学部の多くのゼミ生にも恵まれ、無我夢中で研究を進めているうちに、この3月で定年を迎えることになった。

40年余の研究生活のなかで、とくに印象深いことは、一緒に研究を進めた若い人々の多くが、世界で活躍する立派な研究者に成長されていることである。改めて若い人の能力のすごさを感じ、感慨深いものがある。